

エデュコ **Educo**

地球時代の教育情報誌

No.35
2014年秋



巻頭インタビュー p.2

舞台音楽家・作曲家

宮川 彬良さん

知っておきたい教育 NOW p.4

小学校算数の調査結果を受けた学力向上への取り組み
調査の結果・分析を「生きた学力」につなげるために

きょういく見聞録 p.8

東日本大震災を語り継ぐために

仙台市・教育復興実践事例集

「明日の子どもたちのために 第2集」に込められた思い

地球となかよしピックアップ p.10

愛知県豊田市

こどもによる日本の伝統芸能

インフォメーション 北から南から p.12

地球となかよしゼミナール p.14

身近な環境を調べてみよう

一生きものの姿かたちの不思議を知ろうー

神奈川県立生命の星・地球博物館

コラム p.15

「道徳」教科化をめぐるって

ほっとな出会い p.16

書籍音声配信 株式会社オトバンク会長

上田 渉さん

子どもの頃に覚えた歌の意味が大人になってわかる。 その時、震えるほど感動するんです。

みや がわ あき ら
舞台音楽家・作曲家 **宮川 彬良**さん

舞台音楽家として、ミュージカルやオペラの台本に音をつけられることが多いのですね。

僕は、かなり「言葉」にはうるさいんです。作曲した「マツケンサンバII」もそうですが、歌詞やせりふに曲をつける時には、自然なイントネーションや言葉の区切りになることにいちばん気をつかいます。

例えば、ミュージカルで「あすの朝」という言葉があったとします。そこで、音楽と言葉のイントネーションが合っていないと、言葉を判別しようと、脳が考えるモードになります。ミュージカルは情報の嵐。歌詞を聴いて、思考を始めてしまうと、そこで鑑賞がストップして、舞台についていけなくなってしまう。感覚でどつぶりつかってもらわないとおもしろくないのに、です。だから、ミュージカルの世界に浸れるように、普通に見ていて心を奪われるように、音楽を作っているんです。

テレビ番組やコンサートで、童謡や古典をよく取り上げておられます。

音楽の授業で、言葉が難しい、時代背景が古くてわかりにくい、子どもに受けにくいといって、童謡を取り



着くために、どこにどんな芝居を入れて、どんなせりふを入れ、どんなアレンジをしていくか。「赤とんぼ」とは、どういう歌なのか、改めてじっくり歌詞を読んでみました。

赤とんぼを「負われて見る」のは、自分の背中中で「見」た「赤とんぼ」。「山の畑の桑の実を小籠に摘んだ」のは誰？自分には負われていて摘めないんだから、負ぶっている「ねえや」が摘んだんだとわかる。そして、「ねえやは嫁に行」った。もう消息はわからない。負ぶわれている、ここに何があるか。背中での温度があるんだ。ぬくもりがある。かすかな記憶だけでも、まぼろしではない。まぼろし「か」、そうではないと言っているんですよね。なぜなら、温かさを覚えているから。ここで、「あつ」と思っただんですよ。この曲は、「ぬくもり」の歌なんだと。

ぬくもりという言葉は、歌詞のどこにもない。けれども、ぬくもりという言葉にたどり着いた僕は、本当

扱う時間が短いケースもあると聞きますが、実にもったいない。その時には歌詞の意味がわからなくても、とりあえず覚えておくことはすごく大切だと思う。山田耕筰や中山晋平のメロディにのせた北原白秋、野口雨情、三木露風などの詩は、子どもの頃に、自分の中にいったん入っておくべきものだと思うんです。大人になって思い出して、歌詞の意味がわかった時に、震えるほど感動する。そのことに、どれだけ価値があるか。

以前、NHKの「クインテット」

という音楽番組で、「赤とんぼ」を取り上げて劇を作り、曲をアレンジして演奏しました。この詩にたどり

※「赤とんぼ」…作詞：三木露風、作曲：山田耕筰

にうれしくなっちゃって、イントロはこうだ、テンポはこうなって、ここでお芝居はこう入れて、明るさはどうで、こういうエンディングと、一点の曇りもなく、ぱぱぱと音になっていったんです。

僕は、歌詞や曲の解釈をいつもこんな感じでやっているんだけど、こーやって読み合わせをやったり、実際に動いてみたりすると、深く想像できるんですね。僕は40代になって初めて、「赤とんぼ」の曲の意味が、「あなたのぬくもりを覚えている」ということだとわかった。よく知っている曲が、実はそういう意味だとわかった！これが音楽をやっていると、いちばん感動する瞬間ですよ。

各地で楽しいコンサートを開催され、多くの世代から人気を集めています。

コンサートで見たいものは、僕の中に何十年もずっとあったものなんです。子どもたちにも、もちろん先生にも、ライブの舞台を、ぜひ見て、聴いてほしいと思います。ライブは、一音一音がその場限りのもの。それを観客につけるわけです。自身の芸術を体感してもらえたら、本

当にうれしいですね。僕のアイデアが授業で使えるなら、先生がたは、どんどん使ってください(笑)。

最近、楽団や文化団体が「もうけない」と、補助金をカットされたり、存続の危機に立ったりしているケースを多く見えています。もちろん、経営努力は必要です。ただ、「文化」それ自体は、お金を生まないもの。「もうける」ことができるのは「文明」なんです。奏でる音楽、立ち居振る舞いとか息遣い、お花を生ける時の角度とかは文化だけど、それそのものは、もうけを生まない。ただ、教えたり、入場料をとったり、CDにして販売することがお金になる。文化があるからこそ、多くの文明が生まれてくる。つまり、文化は文明の母なんです。もともとの文化の部



分が熱くないと、文明も繁栄しないんですよ。

文化と文明、言葉がすり替えられているから、文化がないがしろにされる、ということに、僕も最初は気づいていなかった。だから、文化のこれからのあり方について考え込みました。そして、今、多くの人が思っている「文化」は、本当は「文明」のほうじゃないかと思っただけです。「母」たる「文化」を見失わないようにしないとイケないんです。

多くのプロやアマチュアの楽団で指揮・指導をされています。

指揮をする時、プロのオーケストラと、アマチュア、子どもの楽団への僕の姿勢は、全く一緒です。技術の違いや仕上がるまでの時間の差は、当然あるけれど、僕が求めるのは、熱っぽいかどうか、能動的かどうかです。言われたとおりにするだけじゃなくて、僕の指示を読み取って、能動的にどうやってくるかということとを大事にしたい。赤上げて、白上げて、じゃないけれど、言われたとおりに従えとか、「それは違う！」と頭ごなしに決めつけるのは嫌なんです。指揮者が振ったとおりについ

てこい、ではなく、楽しんでるか、信頼関係があるかどうかです。楽しみを見つけられていないなと思った時には、こういうところが楽しいんじゃないの、どうなの、と聞く。僕はこういうつもりで作ったんだけど、みんなは違うのかな、とか。演奏者には、僕の意図や曲の意味を、いろいろ考えて、僕と同じチームのメンバーとして演奏してもらいたい。

アマチュアの楽団だと、上手でないところも多々あるだろうけれども、そこを無理に揃えようとは思わない。観客に、演奏者のきらきらした目、命そのものを見てほしい。音楽は、戦場でも、被災地でも、いつでも、どこにでもある娯楽です。世界で、生まれも育ちも宗教も容姿も違うなかで、みんなの共通点は、「今、生きていく」ということに尽きる。その命を目ざして、曲を作り、演奏をしたいと思っただけです。

PROFILE

1961年東京生まれ。「宇宙戦艦ヤマト」などを作曲した宮川泰は父。東京藝術大学在学中より、舞台音楽家として多くのショーやミュージカルを手がける。2004年には「マッケンサンバII」がヒット。NHK Eテレ「クイーンテット」NHKBS2「どれみふぁワンダーランド」などの音楽を担当、出演。新日本フィルハーモニーとの「コンチエルトンテII」、「未来の音楽授業！アキラ塾」など、コンサート活動では、自身で作曲、編曲、指揮、ピアノ演奏、解説を行う。2014年より大阪市音楽団の音楽監督を務める。

小学校算数の調査結果を受けた 学力向上への取り組み



帝京大学客員教授
廣田 敬一

平成26年度の調査結果に見る課題

平成26年度の全国・学力学習状況調査の結果が8月25日に公表された。課題としては、次のような事柄が示されている。

① 図を観察して数量の関係を理解したり、数量の関係を表現している図を解釈したりすること

② 根拠となる事柄を過不足なく示し、判断の理由を説明すること（改善の状況が見られる設問もあるが依然として課題がある）

また、調査報告書では、設問ごとに、結果からとらえられる課題と、課題の改善に向けた学習指導の工夫の視点が示されている。主なものを挙げてみる。

- ・基準量と比較量の関係を的確に捉えて、演算決定ができるようにする
- ・情報を図の中に整理して表し、解決の筋道を立てる
- ・問題の解決に必要な情報を選択し、根拠と

なる事実を関連づけることで、解決の方法や判断の理由を説明することができるようになる

・解決した結果や判断したことを振り返って確かめることができるようにする

現在の教育は、「生きる力」の育成を基本理念としている。「生きる力」は、主体的な問題解決の能力が重要な要素である。そして、「生きる力」としての問題解決は、「自ら課題を見つける」「自ら学ぶ」「自ら考え、判断し、行動する」「よりよく問題を解決する」活動である。このような能力を育てる授業をつくらなければならない。

自ら課題を見つけることを重視する

平成26年度調査問題のB1を例にする。

この問題では、37に3の倍数をかけたときの積が、 $37 \times 3 = 111$ のように、各位の数が同じになるといふきまりを基にした計算の工夫の方法を、式や言葉で説明する。算数科



の学習では、このような、数や計算のおもしろいきまりに着目する機会がたびたびある。B1の問題では、1〜3をかける計算をして、乗数が3のときの積が111であることがわかった時点で、「このように積が同数の並びになることが他にもあるのだろうか」という課題意識が芽生えると思われる。それをしっかり受け止めて、教室全体の課題となるように展開することが望ましい。さらに、「もしあるとしたら、次はいくつをかける場合だろうか」と、考察する課題を明確にしていき、見通しを持って取り組めるようにする。

このようにして、3, 6, 9…(3の倍数)という数値を発見したら、「なぜそうなるのか」は、子ども自身の課題として、おのずと意識されるだろうと思われる。

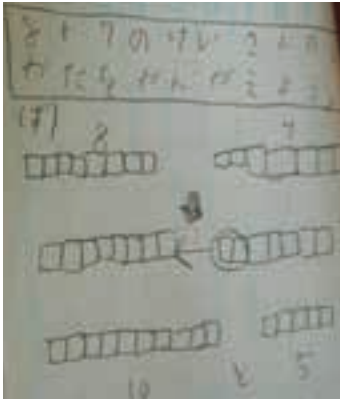
条件と結論を明確にして

問題に取り組むようにする

問題が明確になるといふことは、どうい

結論を得たらよいのかという見通しが立てられることである。文章題などに取り組むときは、「聞いていること」に印をつけるなどして、求答事項を明確にする。次に、その問いに答えるため、「わかっていること」は何かを明確にする。条件に印をつけたり、文章に合わせて操作したり図に表したりする。その意味で、文章題の解決のために、文章の内容を図に表したり、図から数量の関係を読み取ったりする活動が大切である。

例えば、1年で扱う「 $8+7$ 」のようなたし算では、文章に合わせた図は、個数が8と7の図であり、 $8+7$ の結果を表す図は10と5の図である。この計算の仕方の説明とは、この二つの図をつなぐことである。つまり、8と7という二つの数を、10と5にするために、どうしたらよいか（どんな操作をするか）を明らかにすることである。このような筋道を、ブロックなどの具体物の操作や図を用いて、順序よく表現することの指導は、1年生から扱うべき事柄である。



平成26年度の問題B③(1)について、板書例を示しながらの解説があるので、これなども参考にしたい。

問題解決の過程における自己評価の活動を重視する

問題解決を主体的に行うためには、問題解決の過程で、自己の活動が問いに正対した活動になっているかどうかを評価できる力が必要である。求めた結果が、最初の問題に合っているかどうかを考えたり、自分の方法が当該の問題の解決に対して適切であるかどうかを確認したりして、修正したり納得して自信を深めたりする。

2年で、「りんごが何かありました。8こあげたので、のこりが18こになりました。はじめにりんごは何こあったでしょうか。」という逆思考の問題を解決するとき、「あげた」というひき算の文言に着目して、「 ∞

10」と立式して、答えが10個と考えることがある。問題文に戻って、「りんごが10個あって、8個あげたとき」を考えると、「残りは18個にはならない」と誤りに気づくことができる。そこで、文章の内容を図などに表

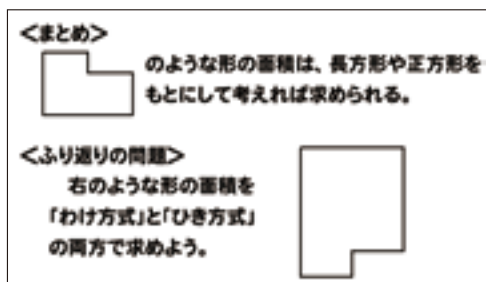


現して数量の関係を明らかにすることが大切である、ということを学習することになる。平成26年度の問題B⑤(1)について、このような振り返り（自己評価）の活動が大切であることを、板書例を示しながら解説している。

コミュニケーションを重視する

発表・検討の場面では、何を発表させるかを吟味して、検討の対象とした情報について、意味を読み取ったり、読み取ったことを説明したりする展開を工夫したい。例えば、4年の複合図形の求積の学習で、図だけを発表させて、他の子に式を考えさせたり、式だけを発表させて、他の子に図を考えさせたりすることが考えられる。

また、問題が解決できた後、自分のやった方法以外の方法で解決したり、まとめに取り上げた代表的な方法で解決したりすること、自分の考えをより確かなものにしたたり、自分以外の考えのよさを体験的に味わったりすることができる。



調査の結果・分析を 「生きた学力」につなげるために



新潟市立巻南小学校
校長 宮川 由美子

校内研修で鍛え合う

「考えをもち、学び合う子どもの育成」
「自分なりの考えをもち、
表現できる国語学習を目指して」

「子どもたちに学力をつける」ために、地道な積み重ねと時間が必要なことは言うまでもない。成否は、それとともに、私たち教師が、授業改善のための「鍛え合う気構え」を持っていくか、持ち続けられるかにもかかっている。

当校は、新潟市の中心部から車で四十分ほどの農村部に位置し、子どもたちは保護者や地域から温かく見守られ、素直で朗らかである。反面、現状に満足している傾向が強く、「考えを自分の言葉で整理し、話したり書いたり発表したりする」ことを苦手としている。

この姿は、全国学力・学習状況調査の結果にはつきり表れている(図1)。それを改善すべく講じてきた手立てに、成果を見出すこ

【図1】本校の全国学力調査の結果 (H24)

	全国	新潟市	巻南小
国語A	77.3	80.7	80.3 (+3.0)
国語B	41.4	46.4	41.2 (-0.2)
算数A	81.1	85.0	87.9 (+6.8)
算数B	45.0	47.4	50.6 (+5.6)

※()は全国比

国語B問題が、全国正解率を下回った

とができなかった当校の教師集団が、文部科学省の「確かな学力の育成に係る実践的調査研究校」として指定されたことを機に、新たな視点で授業改善に取り組み始めたのである。その中心となった

のが、「いのち」を柱とした三つのプロジェクト(いきいき生活・のびそう学力・ちから強い身体)の一つである、「のびそう学力プロジェクト」である。

「のびそう学力プロジェクト」主任には、次の三点を課し、実践を始めた。

- (一) 課題解決の方策を「教師」と「児童」の二つの側面から考え実践すること。
- (二) 校内研修、特に、協議会は鍛え合う場になるよう企画・運営すること。

(三) 実践の成果と課題を、全員が共有できる方策を講ずること。

国語B問題が全国正解率を下回った当校の児童の課題は、前述したとおりである。特に、文章の大事な言葉や文は書き抜くことはできても、それらを目的や必要に応じ、引用したり要約したりするところに弱点が見られた。その課題解決に向けての方策を、教師側と児童側の両面から講じた。

教師は、評価テスト(児童には、「巻南☆国語パワーアップテスト」として示した)の作成と、その結果による授業の検証を行う。児童は、学習の振り返りを行う。

なぜ、市販のテストを使わなかったのか。B問題につながる単元テストでは、教科書とまったく同じ文が提示され、「工夫しているところはどこか」「書き手の意見が書かれている段落はどこか」という傾向の問題が多い。つまり、授業でやったことを暗記していれば、ほぼ解答できるのである。これでは、当校の児童の課題を解決するには至らない。そこで、市販のテストでは計れない思考力や表現力を評価することのできる、教師が自作する「評価テスト」に挑戦したのである。

評価テストの実際

図2は、二年生の「虫は道具をもっている」の評価テストの解答例である。教科書にはない、ダンゴムシとコノハチヨウで問題を作成した。ダンゴムシとコノハチヨウの特徴を讀

【図2】2年生の評価テストの解答例



み取らせた後、「あなたなら虫の体をかりて何をしてみたいか」と問うた。この問題を解くには、それぞれの虫の特徴をしつかり読み取らなければならない。

この児童は、「敵がいたら、茶色い葉っぱを見つけて羽をとじる」と書き、自分で試してみたいことをコノハチヨウの羽の特徴から想像し表現している。これが、本単元で教師がねらった記述である。

【図3】6年生の評価テストの解答例



③投書の中から読み手を説得するための工夫を見つけてみましょう。なぜそのように思ったのか、理由も書きましょう。(80字~100字)

図3は、6年生の「新聞の投書を読み比べよう」の評価テストの解答例である。6年生で話題になっていた「筆入れの中身」について、教師が投書という形で意見を書き、問題文とした。B問題に対応できるように、高学年には、字数の条件をつけて書かせている。投書の中から読み手を説得するための工夫を

見つけ、理由も書かせる問題である。

この児童は、「実際に自分が経験したことをもとに書いているので、分かりやすい。」と書いており、自分が納得した部分を「工夫」として捉え、決められた字数で答えることができた。

私たちが挑戦したこの評価テストを、福島大学(研究当時は新潟大学)准教授・佐藤佐敏先生は、次のように評してくださった。

「授業で扱った教材と同じ構造をした作品を教師が作成し、それを提示している。そして、授業で学んだ〈コツコツ武器〉を使ってその作品を読み解かせている。〈コツコツ武器〉を獲得できた子どもは、教科書教材と違った作品であっても、その〈コツコツ武器〉を活用して読み解くことができる。」

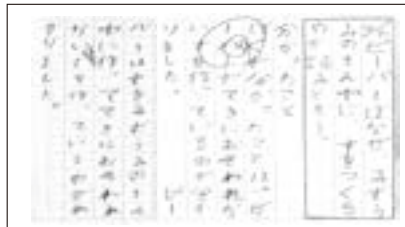
ここで言う〈コツコツ武器〉は思考方略のことであり、教室を離れて発揮されれば、それは〈生きた学力〉になる。

学習の振り返りの実際

図4は、2年生の「ビーバーの大作事」の振り返りである。この日の授業の課題は、「ビーバーがなぜみずうみの真ん中に巣を作るのか」であった。この児童は、「敵におそれないための安全な巣」というキーワードを入れて、分かったことをノートにまとめている。これが本時を達成した姿である。学習の振り返りは、次の三点が成果である。

(一)「書くこと」への苦手意識の軽減。

【図4】振り返りのノート(2年生)



(二)「分かったこと、できたこと、考えたこと」などを自分の言葉で表現できるようになり、学びを実感している。

(三) 振り返りを蓄積することで、ノートを大切に扱うようになった。結果として、学習が連続していった。

目ざしたことをやり抜く教師集団

「今回の単元はこれでいこう」と見通しをもって始めたのに、児童の反応いかんでは、「評価テストの見直し」をすることも多々あった。協議会では、誰彼を問わず厳しい指摘が飛び交い、時には打ちのめされた者もいなくはない。しかし、目ざす方向が同じであり、「全員で授業改善に取り組む」という姿勢に、ぶれが生じることはなかった。

そして、教師一人一人が、研究授業が終了するごとに、協議会の様子や指導者の話も含めて、「のぼそう学力プロジェクト主任」が「研修だより」にまとめ、成果と課題を次時につなげた。教師版「振り返り」であろうか。

学級経営が児童のすべての力の形成につながる基礎であると同様に、学校経営が教師集団として改めて実感している。

で構成する「縦割りグループ」を軸に、児童の「自助」「共助」の力を育てる取り組みも行った。

(2) 実践の内容

○地区子供会を基本とする縦割り活動

異学年集団としての活動を行っており、高学年児童がリーダーとなって活動内容を考え実施している。仲よく遊ぶ、一緒に工作する、市内の公園「野草園」まで一緒に歩くなど、年4回活動を行っている。この活動が、同校における防災教育の基盤の一つとなっている。

○ふるさと！チーム「長町」プロジェクト

子どもたちが地域の一員であることを自覚し、地域のために活動する意識を高めるための取り組みである。今年度は、高学年のリーダーを中心に「地域のためにどんなことができるか」を話し合い、地域に提案した。子どもたちから出された意見には、「お年寄りとの交流会」「避難訓練」「あいさつ運動」「安全マップづくり」等があった。

○ともに！チーム「長町」プロジェクト

東日本大震災後、仙台市立小中学校で実施している「児童生徒による故郷復興プロジェクト」の一環として、長町中学校と連携して立ち上げた。



地域で、あいさつ運動や募金活動を行っている。長町中学校生徒会と長町小学校児童会が中心となり、復興に向けて自分たちに何ができるかを考え、地域のかたがたと協働して行っている活動である。

また、夏休みには沿岸部の被災地を訪問し、地元の中学生や住民の方々と交流する活動を行った。さらに昨年11月には、「今、復興のためにできること」と題したフォーラムを、長町中学校を会場として開催し、大きな話題となった。

○地域安全マップづくり

地域の危険箇所や安全な場所を確認し、児童の防災意識を高めるために行っている。事前にリーダーが防災対策などについて調べ、地域のかたが



たや保護者にも参加していただきながら「地域安全マップ」を作成した。作成後、地震などの災害が発生した際の行動や連絡の取り方、集合場所などを家族で話し合うために「家族防災会議を開こう」カー

ドを各家庭に配布した。

(3) 今後の取り組みに向けて

ふるさと！チーム「長町」プロジェクトのような形で子どもたちの思いを地域に発信し、子ども・保護者・地域・学校がともに活動することができれば、地域としてのつながりが深まり、互いに顔の見える関係を築くことができる。さらに、中学校と連携を密にすることで、「地域・防災・復興」という視点に立った共通の学びを体験させ、防災教育・復興教育の充実を図っていきたい。

未来へ語り継ぐ使命を担って

東日本大震災から4年目を迎え、被災地で最も危惧されているのが「風化」である。実際にM9.0の大地震を経験し、津波被害の壮絶さを間近に見ていた自分たちでさえ、徐々に当時の記憶が断片化していることに、戸惑いと不安を感じている。

1000年に一度と言われる大災害は、つらく厳しい試練を私たちに強いた。かけがえのない多くの尊い命を奪い、日々の平穏な生活を一瞬にして奪い去った。今なお不便な仮設住宅に住んでいるかた、近隣の学校で学んでいる子どもたち、そして、生活の再建の厳しさに必死に立ち向かっている人たち。大震災は、決して過去のものではない。現在も、これからも、長く苦しい戦いを続けていかななくてはならない。

教育に携わる我々がなすべきことは、未来を担う子どもたちに、大震災の経験を絶えることなく語り継いでいくことである。大震災を決して負の遺産とすることなく、今度発生するであろう災害時に、生きて働く知見としていくことが、残された我々の使命である。これからも、教育による復興を旨として、長い道のりを、ともに歩み続ける覚悟である。☺

(宮城教育大学教育復興支援センター 副センター長 野澤令照)

*ふるさと復興プロジェクト

東日本大震災が発生した平成23年度から、仙台市立小・中・中等教育学校・高等学校・特別支援学校で、保護者、地域、関係機関等と協力し、復興に向けて地域のために活動を行う場面を設定し、「自助」と「共助」の力を育み、児童生徒の社会の一員としてたくましく「生きる力」を育てることを目的として取り組んでいるプロジェクト。「復興へ！学校の力結集！」のスローガンのもと、市内各区から選ばれた小中学生16名の推進委員会が中心となって企画・立案を行っている。

<http://www.sendai-c.ed.jp/~soudanka/H24/seitosisidou/project/index.html>



東日本大震災を語り継ぐために

—教育復興実践事例集「明日の子どもたちのために 第2集」に込められた思い—

2011年に起こった東日本大震災は、大津波が襲った沿岸部に大きな傷跡を残し、被害がそれほど大きくなかった内陸部にも、マグニチュード9.0という大地震をもたらした。あれから4年、大震災の壮絶さを目の当たりにした自分たちでさえ、徐々に当時の記憶が断片化していることに気づき、はっとさせられることがある。大震災の「風化」は着実に進んでいる。

しかし、私たちは「風化」を見過ごすことはできない。かけがえのない多くの尊い命を奪い、日々の平穏な生活を一瞬にして奪い去った大震災。今なお不便な仮設住宅に住む人々、近隣の学校で学ぶ子どもたち、そして、生活の再建に必死に立ち向かう人たち。大震災は決して過去のものではない。

私たちが今なすべきことは、未来を担う子どもたちの命を守るために、大震災から得た知見を絶えることなく語り継いでいくことである。それが、我々の使命でもある。

ここに紹介する教育復興実践事例集は、そんな教師の思いを集約したものである。未来につながる資料となれば、我々の思いも報われる。

仙台市小学校長会・仙台市中学校長会・宮城教育大学教育復興支援センター

教育復興実践事例集に込められた思い

仙台市小学校長会・仙台市中学校長会・宮城教育大学教育復興支援センターの三者の協働で制作した教育実践事例集「明日の子どもたちのために」は、今年3月に第2集が刊行された。

第1集は、東日本大震災から2年目の平成24年度に発行し、多大な支援や励ましをいただいた全国の学校関係者に、恩返しの気持ちを込めてお届けした。

被災した地域に住む私たちには、大震災の経験を風化させてはならない、次代へ語り継がなくてはならないという強い思いがあった。だが、行動を起こさなければ、やがて記憶も薄れてしまう。当時は復興がまだまだ進まない時期だったが、せめて震災後からの学校の取り組みを集めておこう、記録しておこうという思いに駆られて、行動を起こした。

第1集では、まず、学校におけるさまざまな実践事例を収集することから始めたが、実に多彩な取り組みがなされており、次代に語り継ぐ貴重な資料になると確信した。地元のマスコミでも取り上げられるなど第1集の反響が大きく、第2集も作成することになったが、今回は、津波被災校の現状や防災モデル校の取り組みなど、テーマごとにまとめることとした。



防災教育の現状

宮城県及び仙台市では、全ての学校で防災教育・減災教育に重点的な取り組みがなされている。学校の置かれた環境や地域の特性に違いはあるが、子どもの命を守ることを願い、さまざまな実践がなされている。

仙台市教育委員会では、昨年度から防災モデル校を指定し、新たな防災教育の開発に取り組んできた。宮城県教育委員会では、今年度から、防災副読本の有効活用に資するために、モデル校を設置して取り組みを始めた。その成果が待たれるところである。

ここでは、実践事例集の中から、地域との連携の事例として、仙台市立長町小学校の取り組みを紹介する。

(1) 学校の沿革

仙台市立長町小学校は、仙台市南部の長町地区に明治6年に開校した、歴史と伝統のある学校である。人情に厚く、都市部にあっても住民のつながりが強かった地域だったが、JRや地下鉄の駅に近いこともあり、マンションが次々に建設され、地域の人口増加も著しい。それに伴い、住民の意識も多様化し、住民どうしのつながりが希薄になっていることは否めない。東日本大震災以来、日頃の地域のつながりが重要なことが改めて見直されていることもあり、同校では、「顔の見える関係づくり」をキーワードに、子供会や町内会、地域商店街や近隣校と連携したさまざまな活動に取り組んだ。校内では、異年齢集団



◀大沼小学校の雅楽発表は『越天楽今様』と『胡蝶』。「謡」で参加する3年生は、初舞台。6年生は「本番は少し緊張するけれど、何度もやっているから大丈夫」と頼もしい言葉。
■豊田市文化振興財団では、子どもが伝統文化に親しむ場をつくらうと、三味線や和太鼓、日本舞踊などの指導者を各学校にコーディネート。「国語」(俳句)や「図工」(造形)、「書写」などの授業にも講師を派遣し、生きた文化に直接触れられるようにしています。

愛知県豊田市

「こどもによる日本の伝統芸能」

大沼小学校・雅楽―和のオーケストラの響き

毎年夏休み、豊田市では、市内の子どもたちが一堂に会して伝統芸能を発表する「こどもによる日本の伝統芸能」が開催されます。工業都市というイメージの強い豊田市ですが、豊かな森林や溪谷、里山があり、市内の各地域に歴史や多様な文化が伝えられている街なのです。この発表会は、大切に継承してきた、地域に伝わる古来の文化を知り、市民が郷土・豊田市を深く理解する貴重な場として定着しています。今回は、発表校の一つ、大沼小学校の活動を紹介します。

全校で取り組む地域の誇り「雅楽」

市の中心から車で40分。大沼小学校(児童数39名)は、鮎の棲む溪谷も近く、自然豊かな地にあります。

大沼地区では、明治26年に「大沼雅楽会」が発足。昭和60年、地域に伝わる文化を受け継ごうと、大沼小学校で雅楽の活動が始まりました。

現在は、3年生以上の全校児童が、週1回、「総合的な学習の時間」に、講師をお招きして練習を行っています。低学年は練習の様子を見学して、絵日記にまとめるなど、全校で雅楽に取り組んでいます。

今井章夫校長先生は、大沼小赴任以来、すっかり雅楽の響きのファン

に。「実は、雅楽の生演奏は、大沼小で聴いたのが初めてです。子どもたちは、『雅楽を聴くとなごむ』『昔の人の心に触れた気がする』と、日本古来のオーケストラの音色に、愛着をもっているんですよ。」

発表会での拍手が励み

学校内での学芸会、卒業式の他、地域行事である熊野神社での舞の奉納時には、雅楽の生演奏で華を添えます。デイサービス施設への出張演奏なども行い、お年寄りにも、とても喜んでもらっているとのこと。1月には6年生が、雅楽の活動を通して学習したことや思いを発表し、次の世代に伝統を引き継ぎます。



翌日の本番に向けて講師や先生とともに入念な練習。子どもたちは、音楽の授業とはまるで異なる雅楽の楽譜の読み方も、苦にもせず身につけるそう。繊細な楽器も、上級生の姿をお手本にして、大切に扱う習慣がついています。

▼大沼小では、保護者が本番の衣装の着付けをお手伝い。雅楽の衣装は特殊なため、着付けの講習も行います。学校と保護者をつなぎ、雅楽への理解を得る機会となっています。



▲迫力あふれる、全身を使ったきびきびとした力強い動きが印象的な、稲武小学校の「稲武太鼓」。



▲堤小学校の「西山万歳」。鼓や扇を使って、七福神を楽しく紹介。張りのある声での節回しに万雷の拍手。

「また、夏には「こどもによる日本の伝統芸能」、秋には市の音楽大会で、大勢の人の前で雅楽を披露します。舞台の幕が上がると、どよめきが起こり、演奏後には盛大な拍手をもらって、子どもたちは満足気です。「雅楽のよさを大勢のかたに知ってもらうことが、子どもたちの励みです。」と、校長先生はほほえみます。

次世代へ引き継ぐ雅楽の心

大沼小では、先生たちも、笙や箏など、それぞれ楽器の担当を決め、講師の指示にきめ細かく対応できるように、雅楽の勉強に励んでいます。先生たちは、「子どものほうが、断然、吸収が早いです。」と笑いながらも、ときには講師から厳しい指導を受ける子どもたちをフォロー。

大沼小学校のこれからの課題は、子どもたちの卒業後、どう雅楽に関わってもらおうかということ。約30年にわたって続けてきた大沼小の雅楽。最近では、保護者の中にも、小学校時代に雅楽に親しみ、その大切さを学んだかたがいます。「大沼でこれから生きていく子どもたちに、ぜひ教える側に回ってほしい。」と先生たち。地域の誇りである文化を次世代に引き継ぐべく、地域と学校がともに努力を重ねています。

東京

「和文化」で育む、 自分に誇りをもつ子ども

武蔵村山市教育長
持田 浩志

武蔵村山市では、地域や郷土、日本を深く理解し、自分たちの生きる基盤である郷土や日本を好きになることで、子どもたちの自尊感情や自己有用感を育む取り組みに力を入れています。各小中学校でも、積極的に伝統的な「和文化」理解教育を行い、市内の各地域に伝わる文化も学習に取り入れて、特色ある学校づくりに努めています。自分たちの文化に誇りを持ち、国際社会で活躍できる子どもに育てほしいと、教育目標にもその旨を掲げました。

これまでにも、東京都より「日本の伝統・文化理解教育推進モデル地域」の指定を受け、小中学校が連携して、9年間を見通した和文化教育の充実を図ってきました。例えば、「小中学校百人一首大会」の開催です。冬に行われるこの大会は、審判の指導も入る本格的なものです。昨年度は、小学生の部は団体戦で行い、26チーム78人、中学生の部は個人戦で、19人が参加し、各学校を代表する選手が、凜とした静けさの中で真剣に札を見つめ、熱戦が繰り広げられました。子どもたちは、ふだんから、和歌を口ずさみながら登校したり、休み時間にも練習を行ったりするなど、古典の響きを楽しみ、伝統的な日本語を体感し、学年が上がるごとに歌の背景などへの理解も深め、日本の文化への愛着を高めるとともに、技術を向上させています。

平成26年度は、和文化教育学会と連携し、11月21日（金）・22日（土）の両日に「和文化教育第11回全国大会 武蔵村山大会」を開催します。市内全小中学校から代表1学級が、小中一貫校「村山学園」に集い、日本の挨拶・村山音頭・村山うどん作り・箏曲・お囃子・茶道・相撲・和算・俳句・村山大島紬など、日本の伝統文化や、武蔵村山に伝わる文化についての授業を公開します。

梶田叡一先生の基調講演、シンポジウムなどの他、児童・生徒による意見発表「我が国の先人の生き方に学ぶ」も予定しています。本市の和文化教育実践の蓄積と、村山の子どもたちの生き生きとした姿を、ぜひご覧ください。



※大会の詳細を武蔵村山市教育委員会ホームページに掲載しています。
<http://musashimurayama.ed.jp/>

北海道

「本物」の体験から 「生きる力」を育てる

～地域に根ざしたアイヌ文化を学んで～
千歳市立末広小学校教諭
杉森 卓也

イランカラプテ（あなたの心にそっとふれさせてください）！

子どもたちの元気な挨拶で、アイヌ文化学習が始まります。この学習も今年で21年目。すっかり本校の「顔」になりました。1993年、千歳市内でアイヌ文化の伝承保存活動をされていた保護者の協力をいただき、学会会の演目に「アイヌ民族の歌と踊り」を取り入れたことが始まりです。3年後には、地域の方々・団体の理解と協力も得て、空き教室に伝統的家屋「チセ」が完成。同時に生活科、総合的な学習（当初は社会科）の各学年のカリキュラムができ、歌・踊りや遊び（低学年）、サケ漁やイナキビの栽培と料理（中学年）、道具や楽器作り・人権（高学年）など、地域の方々の指導を受け、体験を中心に据えて発達段階に応じた学習を進めてきました。

3年生では、サケ漁を体験します。サケをマレク（鉤鉸）で突き、イサバキクニ（打頭棒）で頭を叩き、しめる様子は子どもたちには衝撃的です。最初は残酷と感じますが、サケに感謝する儀式を見たり、解体しながらサケの部位を余すところなく食し、道具として用いる話を聞いたりするうちに、だんだんと自分たちが他の命によって生かされていることに気づいていきます。当然、その後自分たちで作ったサケ料理「チェブオハウ」は「おかわり！」と全て平らげます。

この学習は、子どもたちが文献資料等を用いて断片的に調べるだけではなく、実際に千歳のアイヌの人々の生活に根差していた「本物」にふれ、その価値に気づかせることを重視しています。その具体的な体験により、五感を通して人々の工夫や苦勞を知り、さらに自然や命を大切にす精神文化の素晴らしさに気づかせます。多様な価値観に共感するとともに、自分たちの生活にも生かそうとする心を育てていきます。「本物」による直接体験こそ、子どもたちに、自らの課題をもち主体的に追究する「生きる力」が



ついていくのだと私たちは考えています。

福岡

大阪

ユネスコスクールのまち おおむた

～全市をあげての
「持続可能な開発のための教育 (ESD)」～
大牟田市教育委員会

大牟田市は、福岡県の最南端に位置し、かつては、「炭の都」として、石炭産業を中心に発展しました。現在、石炭関連の施設等が「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」として、ユネスコ世界文化遺産の本登録に向けて最終段階に入っています。教育委員会では、平成23年度に市内の全小・中・特別支援学校34校が一斉にユネスコスクールに加盟。持続可能な社会づくりの担い手を育成するために、市をあげてESDを推進しています。

ある小学校では、炭都としての歴史を踏まえ、エネルギー環境教育を中心にESDを進めています。イベント的な学習ではなく、学年に応じて系統的にカリキュラムを組み、地域の産業を踏まえたエネルギーへの理解に継続して取り組みます。友好都市である中国の大同市との交流では、両市の水環境・水質の共通性と差異性を探る実践を行いました。子どもたちは、「世界」「国際協力」という視点から、「水」がいかに貴重な資源であるかに気づきました。

また、多くの学校が石炭産業化学館、そして三池炭鉱や三池港などの「明治日本の産業革命遺産」を見学。事前学習をしっかりと行ったうえで、近代の石炭産業システムについて多面的に学び、歴史や技術の発展、エネルギー利用などについて思考を深めています。

教育委員会では、年2回「ユネスコスクール研修会」を開催し、理念等の共通理解を図り、義務教育9年間を見通した活動ができるようにしています。また、毎年1月には「ユネスコスクール子どもサミット」を開催。環境・福祉・キャリア・郷土の学習等、各学校のESDの取り組みについて全校が発表し、交流します。

本年度からは、文部科学省の「グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業」に本市の企画が採択。国内外の学校との連携・交流をさらに活発化させています。大牟田の子どもたちが、次世代の日本、さらには世界を支え創造していく、グローバルな人材に育つことを期待しています。



ともに歩もう ともに学ぼう ひとすじの道

枚方市立山田中学校校長
寺西 勉

山田中学校では、教員が一丸となった「チームYAMADA」として、自主勉強会「SE(せ)会」を開き、熱心に授業改善・生徒指導などについて話し合い、検討を重ねている。授業に乗ってこない生徒をどうひきつけるか、問題行動にどう向き合うか。本校はこれまで幾度となく暴力行為や授業不成立などの「荒れ」を経験してきた。そのつど、教職員は粘り強く課題克服や生徒支援に取り組んできた。取り組みの原点は、「何があっても子どもと向き合う」ということ。この伝統ある原点を大切にしながら「チームYAMADAでオンリーワンの活動」に取り組んでいる。

この取り組みをベースに、山田中学校区として、平成24年度より国の人権教育総合推進地域事業を受け、小中が連携して、人権教育の視点に立った「集団づくり」「授業づくり」の研究を進めている。一人ひとりの子どもたちの根っこに『自分大好き!みんな大切に!』の気持ちを育もうと、例えば、「集団づくり」では、以下のようなことについて、教職員の共通理解を徹底している。

自分が人から大切にされていると実感できて、自己や他者を尊重しようとする感覚や意思が育つ。明るく丁寧な言葉かけによって、人のやさしさや温かさを実感し、教師と児童生徒の良好な関係を築き、児童生徒に人間関係の築き方を学ばせる。人は、認められることで自尊感情が高まる。一人ひとりに目を向け、わずかな努力や伸びを見落とさず、具体的に何がどうよかったかを評価する、などである。

上記は実践の一部である。平成26年11月14日(金)には、本校及び校区の小学校で、「人権教育総合推進地域事業研究発表大会」を開催する。主題は、「一人ひとりが大切にされ、つながり・学び合い、確かな力を育む学びの創造をめざして」。全員がわかる、考えを伝え合う授業づくり、人権教育の視点を入れた学習集団づくりについて研究実践発表を行う。小中学校が連携した、本校区の人権教育の視点に立



った学びのあり方を、ぜひごらんいただきたい。

※研究会についての詳細は山田中学校ホームページに掲載しています。
<http://www.city.hirakata.osaka.jp/site/yamada/>



地球となかよしゼミナール

博物館の学芸員による、3回にわたる環境学習アドバイス。
2回目の今回は、磯の生きものについて解説していただきます。

身近な環境を調べてみよう

— 生きものの姿かたちの不思議を知ろう —

神奈川県立生命の星・地球博物館 ● 主任学芸員 佐藤 武宏

無脊椎動物ってなんだろう

中学校の理科では、動物は脊椎動物と無脊椎動物の二つに大きく分けられる、と学びます。しかし、30を超える動物の門のうち、脊索動物門の一部だけが脊椎動物に過ぎず、残りのすべては無脊椎動物なのです。動物を脊椎の有無で二分する分け方は、動物をヒトに近縁なものとしてそれ以外に分ける、便利だけれどもよっと不公平な分け方ということもできるかもしれません。

海と陸のはさま・磯に出かけよう

地球上のありとあらゆる環境に適応して驚くべき多様化を遂げた無脊椎動物の多くを、簡単に観察できる場所の一つが磯です。春から夏にかけての季節は潮の満ち引きが大きく、普段は水の中に息するさまざまな生きものを観察することができます。

引き潮のときに海水が取り残された「タイドプール」と呼ばれる水溜まりでは、岩の表面にカイメン（海綿動物門）、イソギンチャク（刺胞動物門）、コケムシ（外肛動物門）、ホヤ（脊索動物門）といった、固着性の生きものを見る

▶タイドプール



ことができます。しかし、何と云っても、ハイライトは石の裏側です。ぜひ、タイドプールの中の石をひっくり返してみま

しょう。カニやヤドカリやエビ（節足動物門）、二枚貝や巻貝やウミウシ（軟体動物門）、ウニやナマコやヒトデ（棘皮動物門）、ゴカイ（環形動物門）、ヒラムシ（扁形動物門）、ヒモムシ（紐形動物門）など、多種多様な生きものが、石の下から無数に姿をあらわします。その姿かたちや動きの多様さは、無脊椎動物、と一括りにするのがためらわれるほどです。

特に子どもたちに人気なのは、カニのなかまです。その姿は精巧でまるで小さなロボットのように。動きもユーモラスで、どこことなく性格もまっちに感じられます。中には複雑な模様を持つものもいますが、それらは周りの環境に溶け込み、天敵の目をあざむくカムフラージュと考えられています。そんなカニを、もともと見つけた場所から別の場所へ移してみると、派手なのに目立たない、その不思議さと見事さに驚かされます。

▶イソガニのカムフラージュ



姿かたちと周囲の環境の関係を知ろう

生きものの姿かたちはみな、周囲の環境に適応し、生き残るための作戦に関係があります。巻貝がその殻にとげやコブを持つのは、身を守る鎧である殻を補強して、天敵の攻撃に耐えるための作戦です。プランクトンを食べるゴカイの鯚冠（さいかん）やフジツボの蔓脚（まんきゃく）は、違う種類の違う器官なのに、プランクトンを捕まえるのに適した、同じようなかたちをしています。カニのハサミを見れば、どんなエサを食べているかがわかりますし、脚を見れば、どんなところで生活しているかを想像することができます。ぜひ磯へ出かけ、生きものの姿かたちについて、なぜこんなかたちに進化してきたのか、環境とどのような関わりがあるのか、思いをめぐらせてみてください。

本物の自然にはとうていかないませんが、博物館に展示している標本からも、生きものの姿かたちの不思議さを読み取ることができます。涼しい場所で、濡れずに、逃げも隠れもしない生きものをつくり観察することができますよ。



神奈川県立生命の星・地球博物館
〒250-0003 神奈川県小田原市人生田499
http://hi.kanagawamuseum.jp/
TEL.0465-21-1515

コラム
「道徳」教科化をめぐる(全2回)

なぜ道徳教育が 求められているのか (上)

上越教育大学 副学長
林 泰成



第2次安倍内閣において設置された教育再生実行会議での「道徳」教科化の議論は、文科省に設置された有識者会議「道徳教育の充実に関する懇談会」に引き継がれ、中央教育審議会でも関連する審議が始まっています。「道徳」教科化の動きは、もはや止めようがない勢いであると言えるでしょう。

教科化への賛否については、いろいろな観点からさまざまな意見が出されています。私も、「教科化がいじめ対応への即効性を有する」などと主張する意見を聞くと、「本当に『道徳』教科化でそんなことができるのだろうか」と疑わしい気持ちになります。しかし、道徳教育の充実が必要なことだと考えます。なぜなら、教育の営みには、意識するしないにかかわらず、常に教師からの人格の影響が存在し、それこそが教えるという営みの中核にあるべきものではないかと考えるからです。

もちろん、学校教育においては、学力を育てることも大事なことです。現代は、まさに知識基盤社会ですから、知識や情報を伝達することとおして学力を育てることも大切なことと言わねばなりません。けれども、皮肉なことに、そうした時代には、知識や情報はいわばインフレ状態にあり、知識や情報の伝達だけでは、教師は尊敬されません。学力を育てる教育も、尊敬に値する教師でなければ、なかなかうまくいかない時代になり始めているように感じられます。

今後ますます情報化の進む未来社会を生きる子どもたちにとっても、同じことが言えるのではないのでしょうか。未来社会は、知的な能力とともに、あるいはそれ以前に、人と人のかかわりの技術とか、人間性とか、道徳性とか、そうしたものをきちんと身につけていないと、とても生きにくいものになるのではないかと考えます。学力という概念自体が、そうしたものを含み込んでとらえられるように、徐々に変化し始めているようにも感じられます

こうしたことの教育は、家庭や社会でやるべきだとの意見もあるかもしれません。しかし、農作業のような共同作業が減少している社会においては、学校教育の中で意図的に仕組まないと、家庭でも社会でもなかなか身につけられないことのように思います。

世界の国々の中には、公立学校では道徳教育を行っていない国もあります。しかし、そうした国々でも、人間関係・人格形成にかかわる教育や、シチズンシップ教育などがまったく置かれていない国は、少なくとも私が知る限りでは存在しません。

ここで論じてきたことは、たとえば、改正教育基本法の第1条に記された教育の目的「人格の完成」に言及することで論じることも可能です。しかし、法的な問題を論じる前に、まずは、子どもたちの未来にとって道徳教育が必要だという視点が重要ではないかと考えます。☺

イラスト ひらた ゆうこ <http://rakugakiya-yh.com>

第12回

地球となかよしメッセージ

作品発表の
お知らせ

「第12回 地球となかよしメッセージ」入賞作品は
『Educo』2015年冬号(2015年1月下旬発行予定)
で発表します!

昨年度の入賞作品は、教育出版ホームページでごらんいただけます。

「地球となかよし」という言葉から感じたり、
考えたりしたことを、
写真やイラストにメッセージをつけて表現する
「地球となかよしメッセージ」。
今年度も、素晴らしい作品が集まりました。



『Educo』バックナンバーについてはお問い合わせください。

書籍音声配信
株式会社オトバンク会長

上田 渉さん

視力を失った人に、読書の喜びを

書籍を音声で配信するオーディオブック事業を始めたきっかけは、大学時代、自分が何をしたいかを自問した時、失明した祖父に何かしてあげられなかったのか、と強く思ったことからです。学者で、書齋をもつほど本が大好きだった祖父は、緑内障で目が不自由になり、本を読めなくなり、机には、虫眼鏡が置いてありました。本をどうにかして読みたいと苦悩する姿を見ていたんです。

今の日本は、目が見えなくなった瞬間に、できなくなるが多すぎます。特に、今までできた「私の好きな本を、好きな時に読む」ということができなくなる。これが、どんなにつらいことか。

これまで、朗読CDなどは、名作文学などが中心で、しかも高額でした。PCやiPodなどの機器が普及した今、オーディオブックがたくさんあれば、インターネット配信で、新刊や流行のビジネス書、雑誌、その日の新聞などを、いつでも好きなスタイルで聞けます。視覚障害者だけでなく、高齢で読むのが疲れるようになったかたや、読み書きに困難があるディスレクシアのかた、さらに多忙で通勤や家事をしながら本を楽しみたいかたなど、「聞く文化」を、いつでも利用できるインフラとして社会に広げたい。「全ての人が本を楽しめる」という、究極のバリアフリー社会を目ざしたいのです。

読むより聞くほうが得意な人もいる

私は、中学・高校時代、いい大学に入るための就職をするためという目的で勉強するといふ雰囲気ながらも嫌で、しかし、それ以外に勉強する意味を見いだせず、成績は最悪でした。いよいよ卒業が近づいた時、目的をもって勉強できる教育環境を、将来、自分がつくる立場になればいいんじゃないか、そのために大学に行きたいと、一念発起しました。ただ、教科書や参考書を黙読しても、全く頭に入っていない。とても悩んで、いろいろな方法を試したところ、百回音読してみても、自分は音にするとう理解できる、ということがわかりました。国語だけでなく、数式も、理科も、英語も、歴史も、全部、音声での理解に切り替えました。「聞く」ということの可能性に気がついたんです。この気づ

きが、今の事業につながっています。もともと、人は意思疎通の6割を音声に依存していると言われていて、ディスレクシアの人はもとより、「目で読む」より「耳で聞く」ほうが得意な人は、実は、たくさんいます。努力しても黙読が苦手な人は多いんですね。学校でも、教材や掲示物など、ビジュアル面には、とても力を入れていると思います。でも、目からの情報量が多すぎて、かえって記憶に残らないことも多いのです。国語の音読もそうですが、「話す・聞く」ことを、もっと活用する余地があるのではないかと思っています。

失敗は、前に進むために必要なこと

実は、大学時代に教育関係のNPOを立ち上げようとして失敗したことがあります。社会人としてはマイナスからの出発なので、そこからは、どんどんプラスになって進んでいくだけです。オーディオブックを知らない人に、知ってもらうだけでもプラスです。「聞き入る」とことで人生の楽しさを得ることができた人がいれば、こんなにうれしいことはありません。

私は、自分が痛いだけ、恥ずかしいだけなら、失敗なんてしたいことではないと思って行動しています。失敗を恐れて動かないということは、何も前に進まないということ。いろいろ試して、なぜ失敗したのかをよく考えて、よし、もう、こういう失敗はしないと、次への教訓にする。それが、前に進み、新しいことに挑戦できる力だと考えています。

うた 渉さん 1980年神奈川県生まれ。東京大学経済学部中退。2004年、株式会社オトバンクを創業。2007年から、書籍の音声配信事業として、オーディオブック配信サービス「FeBe」の提供を開始。プロの声優やナレーターによるオーディオブックを1万本以上配信。公共図書館への貸し出しも開始する。2014年より、社会福祉法人・視覚障害者文化振興協会顧問。http://www.otobank.co.jp/



Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆講師・神田紅さんが、膨大な資料と本、取材を基に創作し、聴衆に感動を与えるために十何稿も改作を重ねるといふプロ意識に敬服した。その姿勢から、教師もプロの指導者として、子どもたちが知的好奇心をもって学び続けていくような指導のあり方を学びたい。(新潟県 松田正實) ◆仙台市立向山小学校「小学校外国語活動の可能性を求めて」。手段として外国語を使うのであり、目的はコミュニケーション能力の育成、国際社会への広い視野(理解)という、本来の外国語活動の存在意義を改めて問い直すすばらしい取り組みである。(静岡県 豊田公敏) ◆「江戸子1号プロジェクト」のシステム化の指摘は、これからの学校組織のあり方を明示している。一人一人の教員の職人気質を組み合わせ、職人芸を最大限に活用し、教師が互いの個性と役割を知り、認め合う組織と変容する人材マネジメントが、喫緊の学校課題だ。(京都市 坪井良夫)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。